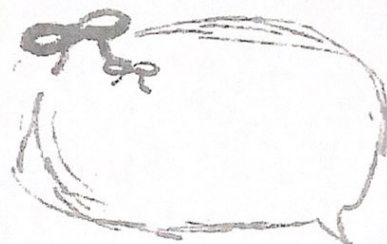


母塾

VOI-11

2019-1-15



新小岩幼稚園・未就園児クラス

アドバイザー 猪之鼻晴子

『 子どもを心配するということ 』

2学期が終わり、終業式の日に通達表とたくさんの荷物が返ってくる。毎年驚くのは、体操着・上履きに加えて上着が何枚もあることだ。朝、寒いので着て行って、帰りは暑いので忘れて来ていた上着をすべて持って帰ってくる。おまけに傘も2本持っている。

寒がりな親はどうしても「それじゃ寒い寒い、もう1枚着なさい」と声をかけてしまう。「風邪ひくよ」と。本当は子どもは常に動いていて、体温も高いので1枚少ない方がいい。厚着は汗をかいて、体を冷やすのでかえって子どもには迷惑な話である。

私の母は心配性だったので、私と弟に小学校の間、冬は半袖・半ズボンに許さなかった。みんなが半袖・半ズボンで体育をしても二人だけはいつも長袖・長ズボンだった。窓の下の校庭に弟の姿は1人だけ目立っていた。

「風邪ひくよ」「転ぶよ」「あぶないあぶない」が母の口ぐせだった。本当に弟は特にすぐに風邪を引いて、体育でも転んでばかりいた。そのたびに「ほらね、だから言ったでしょう」と母は誇らしげだった。

人間は「ほらね」と言いたい生き物だ。自分のやっぱり思った通りだと安心する。子どもがいつも元気でいて欲しい、ケガもケンカもしないで欲しい。それは親の願いである。心配するからこそ声をかける。

それらの言葉は子どもにとって大きな暗示となる。「あなたはすぐに風邪をひくんだから」「鈍いんだから転ばないようにね」心配して言ったひとは子どもの身体に染み込み、ずっと響くものとなる。子どもが大きくなってくると、上着や傘の問題ではなくなってくる。

部活・受験・友だちとの関係・就職・上司との関係・金銭問題……。どう声をかけたらいいものかもわからなくなってくる。

親の仕事とは結局 ① 子どもを心配することと、② いかにか心配をしないように努力するか に尽きるのではないだろうか。

本当に親とは損な役回りだと思う。心配しながら、うるさく思われてしまう。6人分の心配をしだすと、自分がおしつぶされそうになるので、

努めて心配を信頼に変えるようにしている。

「大丈夫」「大丈夫」と子どもに言うのは、自分に言い聞かせているのかもしれない。先回りしてひとこと言っても不安にさせるだけなので、「大丈夫だよ」と言って見守るしかない。そして「ほらね。大丈夫だったでしょう」と得意げに言いたいと思う。

最近では「もう1枚着て行けば？」と声をかけても誰も言うことを聞かなくなっている。

「ママ、ほらね。やっぱり暑かったよ。」「ママの天気予報いつもはずれだね。」

結局、子どもは自分が失敗しながら考えていくしかないのだろう。